紹興は雨に濡れていた

紹興（シャオシン）は雨に濡れていた。
灰色の雲が一面に空をおおい、小降りの雨が降り続いていた。
バスターミナルに降り立った僕は、泥まじりの水たまりを避けながら、少しとまどっていた。バスターミナルや駅に特有の賑わいというものがないのだ。
同乗の人々はすぐにいなくなって、まるでひとり見も知らぬ田舎街に取り残されたかのようだった。
バスターミナルの建物の脇で、雨を避けながら、今朝杭州のバスターミナルで買った中国煙草（小熊猫、三・五元）に火をつけた。
ときおり、大通りを水しぶきを上げながら大型トラックが行き過ぎた。

紹興は雨に濡れていた。
解放北路を僕は南に向かった。
紹興一の繁華街を、人々は肩をすぼめるようにして歩いていた。
傘をさして行き交う人々、カラフルな雨ガッパを着て、自転車で行く人々、通り過ぎるバス。
建築現場の竹を組んだ足場も雨に濡れていた。
国営スーパーはひっそりとしていた。
映画館の前には、若者たちがたむろしていた。
電気機器の商店は人気の少ない歩道に大音量の流行歌を流していた。テープレコーダーの音楽は早くなったり遅くなったりし、おまけに音は割れていた。

解放北路七九号、蘭香大酒家（紹興旅館）。
ガイドブックのホテルを捜していたとき、偶然見つけたホテルに僕はチェックインする。
ツイン、五二元。テレビのリモコンの保証金、五〇元、住宿証の保証金、五元。
備え付けの魔法瓶のお湯を注いで、お茶を入れる。
小熊猫に火をつける。少しきつい。
窓から外を眺めると、黒い瓦の三角屋根の家々が見える。
「東洋のベニス」は雨に濡れていた。

一〇分も揺られていると、一路の路線バスは市街地を抜けて、田園地帯へと入っていった。

景勝地、東湖（トンフー）への途中。
五メートル幅程の舗装道の両側には豊かに生い茂った並木がアーチのように道路をおおっている。並木の向こうは小雨にざわつく運河と、川船。そしてはるかに広がる田園。
バスはときおり、クラクションを鳴らしながら、自転車に乗った農夫を追い越していく。
東湖は雨に濡れて、わずかな観光客もひっそりと言葉を交わしていた。
庭園に向かう沿道には食べ物やお土産の屋台がうずくまっていた。
運河沿いには白壁の家々。
砂利を積んだ川船が、古い石橋をくぐっていく。
降り続く小雨に閉ざされて、静かにうずくまっているかのような東湖、紹興郊外の風景。

バス停でバス待ちをするあいだに、臭豆腐というものを食べた。
自転車の荷台を利用した屋台。
串カツのように、一センチ角程の揚げた臭豆腐を数個串に刺して赤いタレをつけたもの。一本二角。臭豆腐の得体は、知らない。
バス停広場で、軽三輪自動車のタクシーの運転手が退屈そうにしていた。
売店の少女は椅子に腰を下ろして、雑誌を一心に読んでいた。

再び市街地へ戻り、僕は魯迅紀念館に向かった。
雨は休みなく降り続いていた。
解放南路から脇道を入っていくと、街並は参道のようなたたずまいを見せていた。
お土産物の店や食堂や屋台が続く。
臭豆腐の店には観光客が詰めかけていた、降りしきる雨を避けるようにして。
高校生らしい一団が賑やかな声を上げていた。
魯迅紀念館。入場二元。
魯迅とその時代が展示されていた。
三昧書屋、そして百草園。
百草園の黒い畑と、黒瓦に自壁の建物。蛇園には蛇が金網越しに雨に濡れてとぐろを巻いていた。

解放北路をバスターミナルの方へ向かった。
明日の杭州行きのチケット（六・六元）を買う。

ビニールシートの屋根で雨を避けながら客待ちをする屋台で焼きそばを食べた。朝、杭州のバスターミナルで一元三個の肉マンを食べて以来。

夕暮れ近い紹興の裏通りを歩いた。
石畳の坂道。
誰もいない裏通りを僕は歩いた。
田園の街、紹興、運河と水路の街、紹興。紹興酒の街。魯迅の故郷、紹興。

夜には雨が上がった。
紹興旅館の隣に国営の食料品店があったので、何か食べ物を仕入れようと思ってホテルを出た。
食料品店は、日本のスーパーのような形式で、レジでお金を払うようになっているので、自由に品物を見ることができるのだけれども、陳列が悪いのか、かすかに埃を被っているかのような印象なのだ。商品は、酒類と缶詰とラーメンとビスケットなどのお菓子類。あまり食指をそそるような物はなくて、カップラーメンを買おうかとも思ったのだけれども、考えてみれば箸を持っていないので、缶ビール（二缶、七元）と煙草（紅梅、四・一元）だけにした。
帰り道、ホテルの脇の歩道で、水餃子の屋台が湯気を立てていた。屋台といっても、餃子を茹でる大鍋とスープを温めるコンロだけ。客用に小さなテーブルがひとつと丸椅子が三脚ほど。夫婦らしい、おばさんが餃子をつくり、おじさんがそれを茹でて、客に出す。薄暗い歩道の一角で。客はひとり、ふたり。
気に入って、一杯一元の暖かい水餃子をおかわりする。雨が降り続いて、肌寒かった紹興の夜に。
紹興旅館の部屋に戻り、お風呂に入る。
缶ビールを飲みながら、ぼんやりとテレビを見ていた。
中央電視台の二局と他に二局。中国語と英語の字幕付きの香港映画（？）とナント力戦士という日本のアニメ。

＊

とりあえず、僕は何もこれ以上語ることはないのだ。
中国浙江省の典型的な田園の街、紹興の夜にいて。降りしきる雨に濡れた紹興での一日を振り返り、この夜の漠然とした物思いを、例えば、魯迅の文学や思想をたどることによって、あるいは枠づけることもできるだ

ろう。あるいは時代をさらにさかのぼって「竹林の清談」のイメージで彩り、あるいは日本化された漢詩の余情によって物思いの底を上げることもできただろう。

だが、とりあえず今はこの漠然とした物思いを「歴史」の方向に掘り進むことは禁欲しようと思うのだ。それは、今、とても漠然とした状態で、これという確固とした目的もなしに旅をしている自分にとっては、ウソだという気がするからだ。

僕の旅はもっと貧しい。

僕は紹興旅館の夜にひとりいて、中国の「歴史」によって自らの情感と思考を装飾したいという欲求に駆られていた。だが、そうするためには僕の知識は決定的に不足していたし、もっと勉強してくればよかったと後悔もしたのだけれども、本当のところはそうするという根拠はどこにもないことを僕は知っていた。僕はただ、自らの物思いを落ち着ける場所がなくて、少し心もとなく、少し寂しかっただけなのだ。

僕は、ふと思う。中国の歴史に対する知識もなく、漢詩に対する造詣もなく、あるいは中国近代の政治や経済に対する知識もなく、また、中国思想に対する理解もなく、中国を旅するということの確固とした目的もなく、あるいは中国人の友人もなく、ガイドもなく、中国語の会話もＮＨＫのラジオ講座を少し聞きかじっただけ、という自分にとって、それでも中国における旅が成立するとすれば、それは何によってだろう。

おそらく、ただひたすらな「移動」によってなのだ。垂直ではなく、ただひたすら水平に漂っていくのだ。多くの文化人たちが中国を垂直に語っている。そのことに意味がないとは言わないけれども、少なくとも今の僕にとっては意味がない。

今の僕が垂直に物事を語ったとしても、分かったような顔をすることにしかならない。

おそらくこれは「自由」の問題なのだ。

（注）中国におけるビールと煙草の事情

中国のビールは全国ブランド物としては、青島（チンタオ）ビールがある。青島ビールは約三・五元、ビンビールでも缶ビールでもほぼ同じ値段だ。量からいうとビンビールの方がもちろん割安だし、大都市以外では缶ビールを見かけることはない。

地方に行くと青島ビール以外に各地方のビールがある。それらについてはおいおい旅の経過とともにお知らせしたいと思っているが、だいたいにおいてアルコール度は少し低いが、値段は一元から一・五元くらい。これは輸送費の問題だと思うけれども、青島ビールの約半分。ビールに関しては土地の物に限るというわけだ。

なお、大都市のホテルやレストラン以外では、ビールは冷していない。中国の人々にはビールを冷して飲むという習慣がないようなのだ。

従って、生暖かいビールをおいしいと感じる味覚を開発しなければならない。さもなくば、冷えたビールを求めて汗をかきながら街中を捜し回るという徒労を覚悟しなければならない。

煙草に関しても、事情はビールに似ている。

中国人はおそらく世界でも有数の愛煙家であり、成年男子のほぼ全員が煙草を吸うものと考えても間違いない。

従って、街の至る所に煙草屋があり、煙草の陳列ケースひとつを歩道に置いて商売をする屋台も目につく。香港製の高級煙草から地元の安煙草まで数多くの煙草が手に入る。

高級煙草で一〇元前後。労働者の日収ぐらいもする。

僕が初めて手にした小熊猫や紅梅などは全国ブランドの国産煙草で三〜五元。それ以外に各地方の煙草があり、そちらの方は一元前後。

何種類かの煙草を吸ってみたが、どれも悪くはない。ただ、安煙草の中には途中で火が消えてしまう粗悪品に当ったこともあった。

（注）日本化された漢詩について

あなたは高校時代、漢文の授業に悩んだことがないだろうか。

漢詩は独特の抑揚を持ち、独特の音訓の読みでつくられている。現代の日本人にとってはとてもとっつきにくいものだ。かつて漢文が日本人の基礎的な教養であった時代に漢詩の形も定着したのだろうが、ここでは漢詩は日本語で読まれる限りにおいて、すでに日本の詩、特殊に日本化され

た詩であるということを確認しておきたいと思う。
中国の詩を日本に輸入する、言葉は違うけれども、漢字を使用するということでは同じ国に輸入するという、直輸入と翻訳の微妙な接点に、日本化された漢詩は生まれた。従って、翻訳としてはとっつきにくいし、直輸入にしては発音もリズムも違う、日本語以外の何物でもない。
思想としては中国に近いかもしれないが、発音やリズムによって成立する詩としてはむしろ日本である。
詩人の小野十三郎は短歌の七五調を感受性を日本的なものに閉じ込める奴隷の韻律として攻撃したが、同様にして漢詩調というものは感受性を日本化した漢詩の世界に閉じ込めるものだと言わなければならない。理解のきっかけにはなるだろうが、それ以上ではない。
漢詩の独特な美しさは鑑賞する分には問題はないが、その美しさは日本というフィルターを通したものだということを知らなければならない。

僕の旅にはむしろじゃまなものだと言っておきたいと思う。